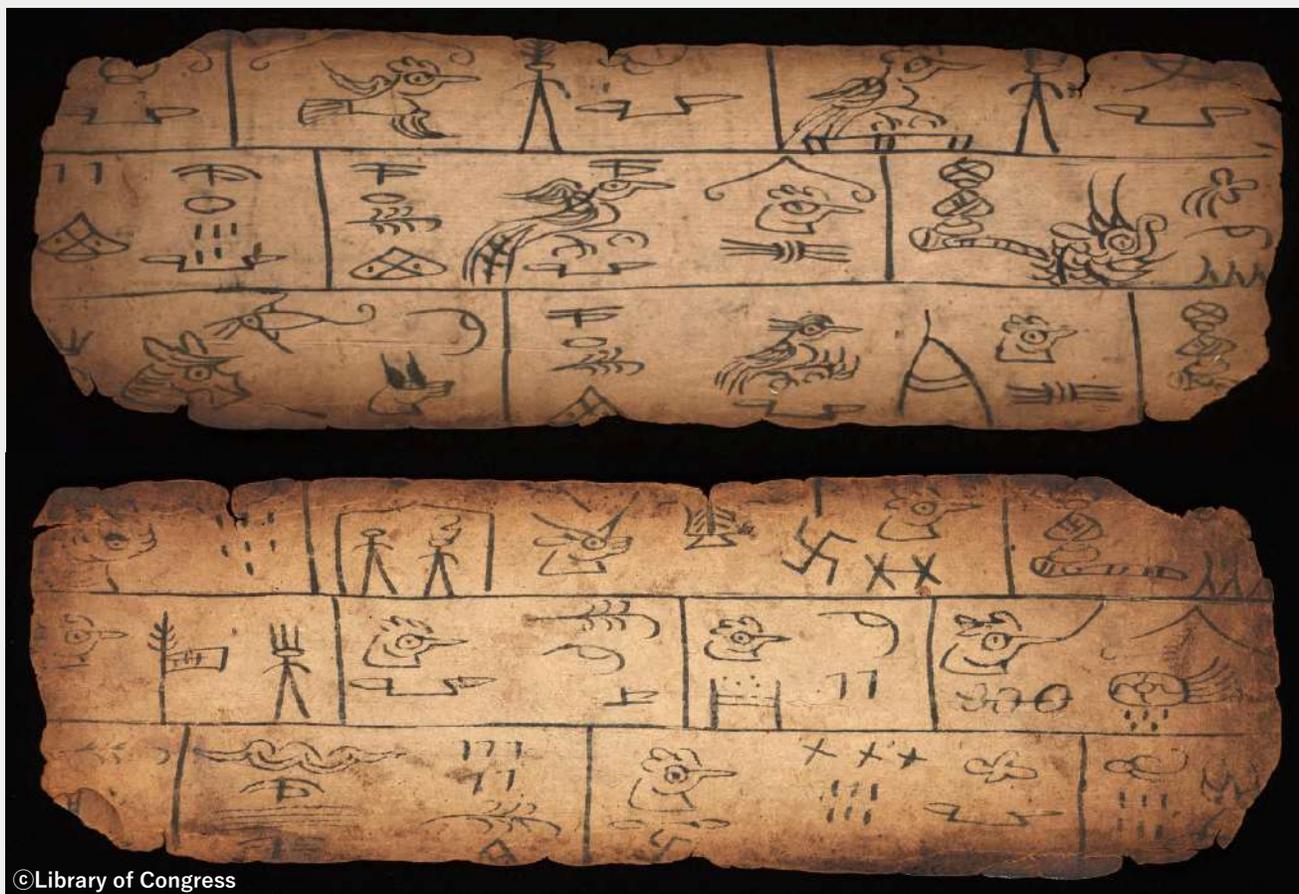


# 公益大ニュース No.8

02	新	任	教	員	の	紹	介	(	森	元	拓)	,	03	一	
04	研	究	の	動	向	(	N.	カ	ロ	ル	/	松	尾	慎	
太	郎)	,	04	一	05	教	員	の	新	著	(	樋	口	恵	
佳	/	遠	山	茂	樹)	,	06	一	07	お	答	え	し	ま	
す	(	神	田	直	弥	/	武	田	真	理	子	/	西	村	ま
ど	か	/	温	井	亨)	,	08	一	10	教	育	活	動	(	
澤	邊	み	さ	子	/	玉	井	雅	隆	/	広	崎	心)	,	
11	地	域	活	動	(	武	田	真	理	子	ゼ	ミ	ほ	か)	



©Library of Congress

## 着任しました

本学では2022年8月現在、専任教員39名（特任教員を含む）で教育研究活動に取り組んでいます。ことし4月、本学に着任した森元拓教授から皆さまにごあいさつ申し上げます。

# 森元 拓 教授（政策コース）

専門：法思想史、法哲学



## 庄内を故郷の地に

2022年4月より本学に赴任しました。宜しく申し上げます。広報誌の編集チームからこの依頼を受けて、さて何を書こうか……と考えてみると、何を書いたらいいのか皆目見当が付きません。改めて考えてみると、この種の自己紹介文を書いたことが一回もないような気がします。

ともあれ、この種の自己紹介文を書く場合、まずは「〇〇出身で……」と書き始めるのかもしれませんが。ところが困ったことに、私には故郷と言えるような土地が残念ながらありません。

高校までは千葉で育ち、大学は札幌の大学に進学しました。札幌へ行ったのは『北の国から』で映し出される大自然に憧れた

からです。大学生の時は、先輩から譲り受けた400ccのオンボロバイクで北海道内はもちろん、九州沖縄まで旅行しました。大学卒業して数年は、サラリーマンとして東京で過ごしましたが、大学時代にすっかりカントリーボーイになってしまったせいか、都会の生活に馴染むことができず、出身大学の大学院に進学することにしました。ここからまた札幌生活が始まります。札幌では、大学院を出た後、札幌近郊の私立大学に就職し、山梨の大学に赴任するまで、合計で20年以上生活したことになります。そして、山梨に10年近く住んだのちに、本学に赴任しました。

私は、各地を転々としました。最も長い期間住んでいたのは札幌です。確かに、札幌には馴染みがあります。とはいっても、札幌に家があるわけでも親戚が住んでいる訳でもありません。有り体にいえば居場所がないのです。これでは故郷とは言えないでしょう。

庄内はいい土地です。とても気に入っています。何を食べても美味しいですし、広々とした平野はまるで北海道のようで、とても親しみを覚えます。何より、人があたたかい。よそ者の私に分け隔てなく接してくれます。

この庄内の地が、私の故郷となるよう、頑張っていきたいと思います。



ドイツの憲法裁判所で（2015年11月）

知を耕す

文部科学省科学研究費補助金の採択を受けた本学教員 2 名の研究分野を紹介합니다。

# 消えゆく言語、AI で後世に

ノヴァコフスキ・カロール講師 (メディア情報コース)

今後の 100 年以内に、世界の 7000 近くの言語の 9 割以上が絶滅する恐れがあると予測されています。重要な無形文化財である言語及びそれらの言語により表現される知識・価値観・文芸などが失われていく前に後世のために記録保存することが急務です。人間の言葉をコンピューターによって処理する「自然言語処理」という研究分野はその課題への取組みにおいて重要な役割を担うと期待されています。例として、世界中の言語学者が収録してきた音声データの多くは文字起こし作業に必要な負担のため、研究機関のアーカイブ等に長年保管されたまま活用できていないという課題に関して、音声認識技術を用いて解決できる可能性があります。筆者は日本の現地語の一つであり、絶滅危機に瀕しているアイヌ語のための自然言語処理技術の研究に携わっています。



国立アイヌ民族博物館にある  
ブロニスワフ・ピウスツキの胸像  
(撮影：Jagna Nieuważny)

ポーランド人である筆者がなぜアイヌ語を研究しようと思ったか聞かれることがあります。実は、アイヌ語とアイヌ文化に関する研究の先駆者にポーランド人のブロニスワフ・ピウスツキ (1866-1918) という人物がいました。彼は、主に当時ロシア帝国領土であった樺太で研究を行いました。また、日本を訪れることもあり。また、当時の最新技術であった蝋管式蓄音機を用いて最古と思われるアイヌ語の音声資料を作成しました。北海道の白老町にある国立アイヌ民族博物館 (ウポポイ) には、写真のようなピウスツキの胸像が立っています。

今回ご紹介したい研究では、ピウスツキ氏が研究していた樺太アイヌ語に着目しています。具体的には、1960 年代から 1970 年代にかけて言語学者の村崎恭子先生が藤山ハルさんをはじめ、樺太アイヌ語の母語話者と協力し録音した未公開の音声資料の自動解析に取り組みます。樺太アイヌ語に関する資料は北海道アイヌ語の資料よりもはるかに少量であるため、非常に価値のあるデータですが、文字起こし作業等の負担が大きいと、現状ではその一部しか公表されていません。本研究では、最先端の機械学習手法を用いて、村崎先生の樺太アイヌ語音声資料の自動解析を可能とするシステムを開発しています。

表には、現段階のシステムが生成したテキストの一部および樺太アイヌ語の専門家が同一の音声の文字起こしを行った結果を示しています。まだ間違っ認識された単語等が少なからずありますが、今後開発を進めることによってより正確な結果が得られると確信しています。

表 音声認識の結果と専門家によって文字起こしされたテキストの比較

音声認識システムの出力 (斜体は誤認識された単語)	hemata ka hemata <i>'oyasih</i> i hee <i>'anmane ike ne'</i> an wenporo kotan <i>o'oma</i> 'aynu ka 'emuyke ruhpa <i>'ike</i> tuy wa <i>pawa</i> 'isam 'isam mayne tani 'ampene <i>'an</i> 'oha kotan nee manu
正解データ (専門家の表記) *1	hemata ka hemata 'oyasi hee 'an manuyke neyan wenporo kotan 'oma 'aynu ka 'emuyke ruhpa nike tuy wa tuypa wa 'isam 'isam mayne tani 'ampene 'oha kotan nee manu
日本語訳 *2	何か、何のお化けだかかいてそのでっかい村いっばいの人間もみんな食いつぶして (一人も) いなくなっちゃった。なくなっちゃって今は空の村になったさ。

\*1, 2 村崎恭子, 『樺太アイヌの民話 (ウチャシクマ) : ウェネネカイベ物語 3 編』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所出版, 2010.

研究紹介

# 会計監査の透明性向上に向けて

松尾 慎太郎 准教授（経営コース）



私の専門は、監査論です。監査とは、簡単に言えば、独立の立場にある第三者が、調べて、確かめて、その結果を報告することです。私の研究対象は、会計監査です。経営者が作成した財務諸表が、一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、企業の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているかどうかについて、職業会計士がどのように調べて、確かめて、報告すればよいかを研究しています。

近年の不正会計事案を契機として、改めて会計監査の信頼性が問われる中、2016年3月、「会計監査の在り方に関する懇談会」において、会計監査の信頼性確保に向けた提言がとりまとめられました。その提言では、会計監査に関する情報提供の充実についての言及がなされました。これまでの監査報告書は、監査意見に至る監査のプロセスに関する情報が十分に提供されず、監査の内容が見えにくいとの指摘がなされていました。このような指摘をふまえ、これまでの基本的な枠組みは維持しつつ、監査プロセスの透明性向上を図るための取組みが国際的に進展しています。我が国においても、「監査報告書の透明化」の取組みとして、2018年7月に行われた監査基準改訂において、監査報告書に「監査上の主要な検討事項（Key Audit Matters：KAM）」の記載を求めることとされました。これにより、監査意見やその根拠とは別に、監査人が当年度の監査の過程で着目した会計監査上のリスクに関する情報の記載が求められることとなりました。

現在、私が取り組んでいる研究は、このKAMに、何がどのように記載されているかの実態調査と、何をどのように記載すべきかの批判的検証です。最終的には、監査プロセスを反映した透明性の高い監査報告モデルを提示することで、会計監査教育への適切なフィードバックの仕組みを構築し、持続的な高品質の監査につながる好循環へ貢献することを企図しています。

## 上梓しました

本学教員の単著、共著を紹介します。

## 『国境の時代』

樋口 恵佳 准教授（政策コース）

去る5月25日、『国境の時代』という論文集が刊行されました。本著に私は、編著の一人として関わらせていただきました。

当該書籍は、立命館大学の特講『日本の国土・国境』を出発点とした、国際政治学、国際法学、地域研究の3つの分野の研究者たちが寄稿した論文集です。第1部では、国境紛争を学術的に考えるために必要な基礎知識を提示し、第2部・第3部において、日本や世界の国境問題について詳述しています。難易度は初学者・一般読者を想定しつつも、学術的に深く切り込む内容になっています。

このような時代、紛争の情報に心を痛めている人も多いかと思います。生の情報ではなく学術的な意見を持つことはそのような生の情報から心を守ることにもなります。今だからこそ、国境紛争に関する学問的知識を蓄えてみてはいかがでしょうか。（大学教育出版、280ページ、2,530円）



# 『ロビン・フッドの森 —中世イギリス森林史への誘い—』

遠山 茂樹 名誉教授

本書『ロビン・フッドの森—中世イギリス森林史への誘い—』は「世界史の鏡」シリーズ（樺山紘一編）の一冊として刊行されました。全体で7章から構成されていますが、その内容をかいつまんで紹介すれば、次の通りです。

第1章では、ロビン・フッド物語を題材に伝説の起源や時代背景をさぐり、多面的なロビン・フッド像に迫ります。ロビン・フッドと百年戦争の関係についても考えてみました。第2章は、ガメリン物語です。森のアウトローだったガメリンはロビン・フッドに比べると知名度ははるかに劣りますが、ロビン・フッド物語の作者はガメリン物語を参照していた可能性が高いのです。第3章では、鹿の独占権と結びついた御料林制度のルーツをさぐります。また、兎の歴史を紐解き、その経済史的意義についても考えてみました。第4章では、ニューフォレストで狩りの最中に亡くなったウィリアム2世の死をめぐる謎に迫ります。ここでは、従来の天罰説、陰謀説、事故説に加え、近年提示された二重スパイ説についても検討しました。第5章では、ウッドストック・パークと最古の森林法を取り上げ、パークの実態と森林法の性格をさぐってみました。第6章では、有名な歴史文書マグナ・カルタと森の憲章について解説し、鹿や樹木の用途を詳述しています。第7章では、グロウヴリィの森と近在の村人たちが持っていた木材採取権の歴史をたどってみました。その権利は21世紀の現在も祭りによってまもられているのです。

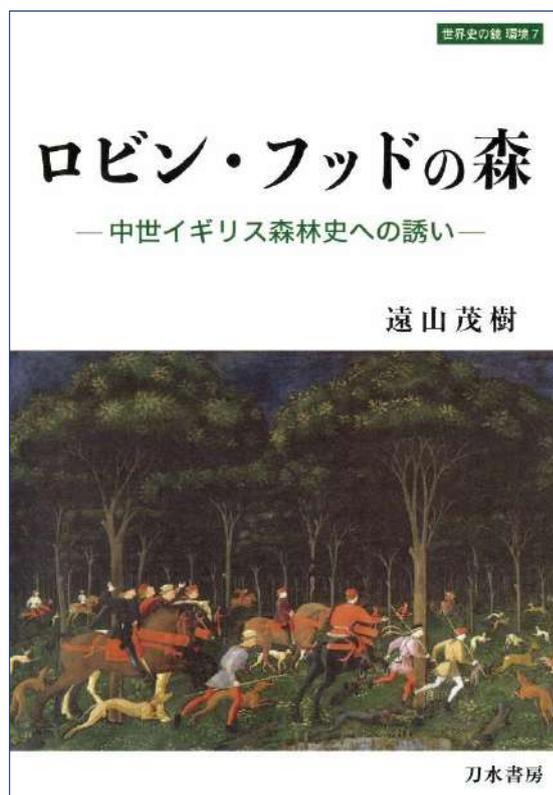
本書は森と人間の関わりをアウトロー物語と史実の両面からさぐる一つの試みです。森はロビン・フッドに代表されるアウトローを生み出すとともに、その棲み処ともなりました。鹿が贈与を通じて王の統治機構に組み込まれていた点も見逃すことはできません。

同じ「森」でも英語の Forest と Wood はどちらがうのでしょうか？ロビン・フッドは実在したのでしょうか？マグナ・カルタが「大」憲章と呼ばれるのはなぜでしょうか？本書はこうした質問にも答えてくれることでしょう。

(刀水書房、222 ページ、2,200 円)



教員の新著



# お答えします

## 学長ってどんなことをしているのですか？



回答者：神田直弥学長

### 大学の改革、学内外の衆知を集めて

私立大学には理事長と学長がいるのが一般的です。理事長は経営面の責任者であり、学長は教学面の責任者として学生の入学や卒業、学位の授与、カリキュラム編成等を決定します。私は学長に就任して3年目となりますが、データサイエンス・AI教育プログラムの導入や2つのコースの専門知識を身につけるダブルメジャー制の導入に取り組んできました。現在は、変化の激しい予測困難な時代であり、ビッグデータやAIを活用した問題解決や、文理融合による複数分野の知見を活用した価値創出が求められています。上記の改革は、時代の要請に応え、社会に有為な人材を輩出していくために導入しました。

学長は教学面での責任者ではありますが、すべての改革を独断で決めるわけではありません。学内で議論し、学生の皆さんからの意見も大切にしながら、改革の方向性を決めていきます。学修者中心の大学として、今後も学生の成長につながる大学改革に取り組んでいきます。

## 公益大の大学院ってどんなところなの？

### 社会変革期に求められる公益学研究の拠点

世界で唯一の公益学の研究・教育拠点として2005年に山形県鶴岡市に開設され、修士課程の開設から18年目、博士後期課程の開設から16年目を迎えました。これまでに160名の公益学修士と5名の公益学博士を輩出しており、修了生は国外を含めて、行政、企業、NPO法人、教育機関をはじめ、様々な現場で課題解決に取り組み、活躍されています。

いま世界は大きな社会変革期にあります。国際社会は環境、経済、人権をはじめとする多くの社会課題と向き合い、多様な主体間のパートナーシップにより新しい社会システムの構築と課題解決を推進することが求められています。本大学院は、この社会変革期に活躍できる人材育成と公益学ならではの学際的な研究を推進することを目指し、企業や地域コミュニティ組織との新たなプログラムの開発など、改革に取り組んでいます。1科目からの受講もできます。年齢や立場を超えて、多くの方にこの学び舎を活用して頂きたい、お待ちしております！

回答者：武田真理子研究科長



大学の役割や研究内容に加え、社会の関心が高いテーマについて  
日ごろいただく質問に本学教員が回答します

### 街の図書館と大学の図書館は何が違うの？

#### 本学図書館は研究目的ですが、どなたでも借りられます

庄内には地方自治体が運営する公立図書館と教育研究機関の運営する大学図書館があります。酒田市のミライニ内にある市立中央図書館は今年5月に移転オープンしました。駅前という地の利を活かし、新たな交流拠点となることを目指しています。住民のための図書館である公立図書館と大学図書館では、蔵書の選書基準は大きく異なり、前者は市民の教養及び生涯学習のニーズに応えた資料収集を目指し、本学酒田キャンパス内の東北公益文科大学図書館は学生の研究に役立つ資料収集を行っています。

図書館どうしの連携により、酒田市の中央図書館の蔵書を本学で借りることもできますし、大学の蔵書をミライニで返すことも可能です。本学図書館の蔵書は以下の URL から検索できます。  
<http://lib-uf.koeki-u.ac.jp/>

回答者：西村まどか准教授  
(図書館長)



公益大図書館は平日 9:00～20:00、土日祝 9:30～16:30 開館（夏季休暇中は閉館日や時間短縮あり）

### マルチプロジェクト研究機構って何をしているのですか？



回答者：温井 亨 教授  
(庄内・地域デザイン  
研究所長)

#### 学外からも研究員を招いて一緒に研究しています

庄内・地域デザイン研究所を例にとり説明しましょう。これまでの研究から1つ挙げるとすれば、内川学です。2007年から15年間、鶴岡の中心部を流れる内川、かつては外堀であり舟運の動脈であった内川とその周りの市街について、山大や高専を始めとする研究者の方々、行政や市民の皆さんと一緒に研究し、年に1回シンポジウムを開き、冊子を発行してきました。水質や生物、ゴミ問題、都市史や都市計画、商店街活性化など様々な研究と、川を使ったイベント、寄席を開いたり、内川と関わる文学についてのシンポジウムを行ったりと、たんなる研究に留まらない地域づくり活動を続けています。今考えているのはこうした活動を鶴岡だけでなく、庄内全域に広げることです。公益大の大学院には、鶴岡市、酒田市、山形県から出向して学び、修士号を取った方々が多数います。その後は職場に戻り活躍している人たちがネットワークを組んで庄内全体のことを考えるようになれば大きな力だと思います。そこで今年度から外部研究員にお招きして新たな体制を組み直しました。今後、庄内という地域に対して、さらにお役に立つ活動を展開できたらと考えています。

学びの現場から

グローバルとローカルの両面から社会に貢献する人材を育成するため、さまざまな取り組みを展開しています。

社会福祉士養成課程

# 「新卒合格6割」支えるワークショップ

澤邊 みさ子 教授 (地域福祉コース)

東北公益文科大学は2005年度から社会福祉士の養成を行っています。社会福祉士とは、福祉や介護に関する相談ごとに対応する専門職です。年1回実施される国家試験に合格した人が所定の登録を受けることにより、社会福祉士の資格を取得することができます。合格率は新卒・既卒を含めて毎年30%弱ですが、公益大の現役生(4年生)の合格率は平均すると50%程、令和3年度は60%で、東北圏内の社会福祉士養成をおこなっている私大では1位でした。



受験勉強の見通しを立てては振り返る、を繰り返すなかで、学生同士が助け合う関係を築く

社会福祉士を目指す学生たちは3年生の春休み頃から本格的に国家試験の受験勉強を開始します。それを支援するために、卒業生による合格者体験談、年数回の模試とその振り返り、直前対策講座(科目ごと

に教員が内容のポイントを説明したり、過去問題を解説したりする)、勉強の進捗状況についての個別面談など、社会福祉士養成課程ではさまざまな受験対策プログラムを実施しています。しかし、受験勉強に取り組もうとしても、何から手をつければよいのか、どのような勉強方法が自分に合っているのか、ということに悩む学生も少なくありません。



互いの学習法を共有したり(上)、悩みと解決策を出し合ったりする(下)ことで、自分に合った学び方を見い出す



この課題に取り組むべく、令和3年度より、勉強方法アドバイス・ワークショップ(以下「WS」)を実施しています。講師は公益大大学院修士課程で学び、学習法をコーディネートする仕事をしている加藤眞由美さんにお問い合わせしています。到達目標のある学習では、「こうやればうまくできるし、成果も出る」と自分で思える自己効力感の持てる学習方法を取ることが大切で、それには、自分の内面、外的条件、そして試験特性を知らなければなりません。そこで、細分化された振り返りや見通しを立てるワークで、これらの自己分析を丁寧に行います。また、グループワークを通して、学習法に個性があることを知り、さらには、学習を助け合う関係性が作られま

教育活動

す。加藤さんは、WSとは別に、希望する学生に個別面談を行い、学生に応じたきめ細かい学習法確立支援も行っています。

学生からは、「WS そのものから、また友人らとの情報共有から刺激をもらえる」、「自分に合った学習法を発見できた」などの感想があがっています。WS後、学生の学習に対する意識が上がり、学生同士が学習方法について気軽に声を掛け合い話し合う雰囲気も作られてきました。

大学生活において、自分を活かす学び方を、プロセスを大切にしながら会得し、生涯の学びに役立ててほしいと思っています。

## 現地留学を再開 世界の激動、自らの目で

玉井 雅隆 教授（国際教養コース）

コロナ禍が世界的なパンデミックとなって3年が経過しました。海外渡航が困難なものとなり、留学自体も中断を余儀なくされました。その間、「学びを止めない」を合い言葉として、本学でもオンライン留学を実施しております。

世界的にコロナ禍のライフスタイルが「ウィズアウトコロナ」から「ウィズコロナ」に移行していくことに伴い、また文部科学省も中長期留学の再開を求めていることから、本学でも留学に関して再開するに至りました。

本年5月より、協定校であるカナダ・サスカチュワン州都に立地するリジャイナ大学へ長期留学として1名を送り出しました。今年度はこの他に、10名近い学生が中長期留学としてアイルランドのコーク大学、カナダのヴィクトリア大学などに留学を行います。

コロナ禍のみならずウクライナ紛争やそれに関連する食糧不足、燃料高騰など、世界情勢は冷戦終結後最大の動きを見せています。いわゆる「ポスト・ポスト冷戦」時代であり、世界は激動の時代を再び迎えました。世界の動きを実際に世界で見ること、そのことは大変貴重な経験となるものであります。

机上の学びではなく、「実際に行ってみて経験して学ぶこと」が実際の留学の醍醐味であり、学びであります。今後とも、本学では世界情勢を慎重に判断しつつ、留学の推進を行っていきたいと考えております。



留学先で各国の学生と交流を深めています  
(2019年、米クレイトン大学への短期留学=学生提供)



2021年度はオンラインで学んだカナダのリジャイナ大学にも現地留学生を送り出した

## ベストティーチャー、広崎心准教授に

教育実践に顕著な成果を上げた教員を表彰する 2021 年度の「ベストティーチャー」は、経営コースの広崎心准教授に決まりました。学生の授業評価で「成長を実感した」と答えた割合がもっとも高い教員が選ばれます。3月23日に本学内で神田直弥学長、三木潤一公益学部長らが出席し授賞式を開きました。

### 受賞のことば

## 契約交渉を「想定外」から体感する



この度ベストティーチャー賞を賜り大変嬉しく思っております。当方は昨年9月に赴任しその秋学期に経営管理論とマーケティング論を担当しました。受講生からはアクティブラーニングに繰り返し取り組むことでいろいろなことをより深く考える習慣がついたといったコメントを多々いただきましたので、その点を中心に振り返ってみます。

まず、マーケティング論では身近な商品やサービスに視野を向けて、商品開発、キャッチや製品コンセプトの探求、プロジェクト企画などに取り組んでもらいました。一部個人での活動もありましたが、多くは4~5名でのグループワークです。この人数にこだわるのはリアルの世界つまり企業のマーケティング部ではこの程度の人数でチームを編成しているケースが多いからです。そして、評価は各課題へのこだわりの深さやオリジナリティのレベルで決まりますが、経営系講義でもあるので翌週には成績上位チームの順位を開示します。

次に、経営管理論での取り組みについて紹介します。この講義では企業の多角化戦略の方向性の理解、業界・企業単位でのサプライチェーンの特徴の理解、そして企業買収や戦略的提携の事例分析を重要視しています。これらは経営管理の視点から企業や業界を分析する上で非常に重要な要素であり、就活戦略にも応用できます。そして、企業での実務経験からいえることは、基本的には企業は論理的に意思決定を行うものの、担当者の熱意や交渉力でそれが左右されることもあるということです。そこでアクティブラーニングでは3つのシチュエーションで学生同士がチーム単位で売り手と買い手に分かれて契約交渉デモを行います。実際に行ってみると身近な友人が実は交渉が得意であったり、慎重になり過ぎたら買いたいものが完売してしまったりと想定外の展開が起きます。この想定外の展開から体感的に学んだ経験がこの講義を高く評価してくれた要因なのかもしれません。



契約交渉とそのための作戦会議をする様子

地域のなかで  
地域とともに

大学の設立理念である公益の実現に向けて、教員、学生ともに多彩な地域貢献の取り組みを展開しています。

武田真理子ゼミ

大震災の体験から学ぶ、つなぐ



武田ゼミは「誰もが安心して暮らせる福祉まちづくりの研究」をテーマに、2008年度より地域の多様な組織等との協働を伴いながら「住民主体の災害時要援護者支援のあり方に関する研究プロジェクト」に取り組んでいます。現4年生8名は、3年次に



災害現場でどう判断し行動するかの「分かれ道」を高校生とともに考える

ドワークなどの学習を重ね、自らが学んだことを地域に還元する活動を計画し、準備に取り組みました。新型コロナウイルス感染症によりその計画は何度も中断と変更を余儀なくされましたが、ようやく2022年5月31日に山形県立酒田光陵高等学校ビジネス流通科2年生39名を対象に、災害対応カードゲーム「クロスロード」を用いた防災学習授業を実施させて頂くことができました。旧大川小学校の経験などにに基づき、いざ災害発生時に自身がどのような行動を取ったら良いのか、普段から何を備えたら良いのか、一緒に考え、学び合う貴重な時間となりました。

デジタル関連企業との情報交換会

DXの知識とコミュニケーション力の両輪を

酒田市内のデジタル関連企業と本学学生の情報交換会を7月20日、学内で開催しました(写真)。応用演習科目「課題挑戦型インターンシップ」の一環で、同科目受講生のほか、メディア情報コースの広瀬雄二教授のゼミ生を加えた6人が、デジタル企業での人材育成策などについて議論を交わしました。企業側から日情システムソリューションズ、管理システム、キューブワン情報など7社の幹部が出席したほか、本学と「デジタル変革推進に関する連携協定」を結ぶ酒田市の担当者も参加しました。



学生からの「求められる人材の条件は」という問いに対し、各社幹部から「公益大生はプログラム言語などの基礎は十分。システム開発はチームで当たるのでコミュニケーション能力が重要」(SIG酒田事業所の石川智宜氏)などと、具体的な助言を送っていただきました。データリテラシーや基礎プログラミングを2年次までの全コース必修とする一方、文理の枠を超えて幅広い能力を養う本学の人材育成の方針を裏付ける機会ともなりました。



#### 表紙写真について

表紙の画像は中国雲南省のナシ族に伝わる『蛇王への生け贄』という文書で、トンパ文字で書かれています。

トンパ文字は世界で唯一、今でも用いられている象形文字で、ユネスコ世界記憶遺産に登録されています。本学の学部から修士課程に進み、2022年度からノヴァコフスキ・カロール講師のもとで研究を行っている田雨冉さんは、自らの民族のトンパ文字を、自然言語処理技術で分析する研究に取り組んでいます。

---

**編集後記** 広報誌第8号を手にとっていただきありがとうございます。今号には「お答えします」というコーナーを新設しました。公益大に関する様々な疑問に教職員がお答えすることで、より身近に公益大を感じていただけることを願っています。（樋口）

**編集スタッフ** 樋口恵佳（編集統括、准教授）、温井 亨（表紙デザイン、教授）、加藤嘉明（特任教授）、進藤 啓（地域共創センター）、進藤悠子（同）

---

「公益大ニュース」8号 2022年8月発行

発行者：学校法人東北公益文科大学 〒998-8580 酒田市飯森山3丁目5番地の1  
Tel：0234-41-1115 Email：kyoso@koeki-u.ac.jp（地域共創センター）

---